

## 《会議録》

### 内 容： 第5回信濃川のあり方検討委員会

日 時： 平成26年2月18日（火） 10時00分～11時15分

場 所： 保健センター 3階 集団指導室

出席者： 十日町商工会議所 池田専務理事  
十日町土地改良区 小林事務局長  
川西土地改良区 数藤事務局長  
中里土地改良区 吉楽事務長  
中魚沼漁業協同組合 長谷川組合長  
（社）十日町青年会議所 馬場委員  
信濃川をよみがえらせる会 山田事務局長  
（一）十日町市観光協会 村山会長  
十日町市商工会連絡協議会 杉谷中里商工会長  
高山地区振興会 高橋委員  
吉田地域自治振興会 高橋委員  
川西地域振興会 柄澤委員  
中里まちづくり協議会 吉楽委員  
新潟県自然観察指導員 野上委員  
J R信濃川発電所業務改善事務所 佐坂所長  
十日町市建設部 貴田部長  
アドバイザー 大熊新潟大学名誉教授  
事務局（建設課） 東技監・池田課長・桶谷・富井

## 開 会

### 1. 開会

### 2. 池田委員長あいさつ

### 3. 報告事項

- (1) 第4回委員会以降の主な経過について
  - (2) 専門部会の議論の内容について（第1回～第8回）
  - (3) 第5回宮中取水ダム試験放流検証委員会中間報告結果について
  - (4) 信濃川の景観に関する意識調査の実施及び集計結果（速報）について
- 《質疑応答》なし

### 4. 協議事項

#### 5年目（平成26年度）試験放流方法について

《質疑応答》

#### （長谷川委員：中魚沼漁業協同組合）

補足を行う。資料P25【3】調査や確認を希望する事項の一番上のサケの漁場調査であるが、「ダム下流の安定した流量を活用し…」とあるわけだが、これは何かと思われる方がいるかと思う。ダム下流というのは、維持流量ということでほぼ一定の量が通年、相当数増水しなければ流れている。特に漁業を行う場合、非常に安定した水が常に流れる。それも少ない量じゃなく、ある一定の量が流れていることが漁をするのに利点になる。その利点とは何かというと、我々が考えているのは信濃川でサケ漁を考えている。どうやって獲るんだということ、信濃川のように大きな川では一般的であるが網で獲るのが一番である。網は刺し網という漁法になる。その場合、水が急に増えると網が流されるためにそれを全部上げなければならない。逆に水位が下がってくると別の所に網を持っていかなければならない。漁をするにあたり具合が悪い状況になる。一定量であればその心配は全くいらず、安定して量がでる。信濃川でサケ漁をするには漁場がどこにあるのか、一定流量はどの程度がいいのか、というものを検証してほしいというのが漁協からの意見である。

#### （数藤委員：川西土地改良区）

P24、7月20日～9月10日の試験放流量（案）であるが、「気温が上昇する時期に放流量100 m<sup>3</sup>/sによる試験放流を10日間実施する。（流入量135 m<sup>3</sup>/s以上の場合のみ）」という形になっている。十日町市がかんがい水利権を

持っており営農しているわけであるので、このことについては特段の配慮をお願いしたい。

#### (大熊アドバイザー)

変動型放流についての補足説明を行う。変動型がなぜ良いのかということは、川とは変動するものであるが、特に河原が濡れたり乾いたりするということである。それにより色んな現象が起こる。河原が濡れたり乾いたりすることで考えると、宮中取水ダムより下流は正にそういうことが広く存在している。西大滝ダムから宮中取水ダムまではそれほど河原があるわけではなく、川幅が狭く、水位が変動してもそれほど濡れたり乾いたりする面積はない。宮中取水ダムから下流が正に変動型をやるに効果が解りやすい所であると認識している。それが今回明確に効果が解らなかったということである。若干ではあるが調査結果から変動型による効果が見えてきていると判断している。一つは、ヒゲナガカワトビケラが水位が下がった時に取り残され死んだ。それをサギが食べに来ていたということが報告されていた。変動することによって、虫が死んだり、生き返ったり、そういったことが川の生態系が維持されてきたことを考えると、そういう現象も重要なことであると考え。もう一点は、流量が変動すると細かい砂が流れる。細かい砂が流れるということは、それが下流の石にあたり苔が剥がれたりすることに影響するかもしれない。流量が変動する範囲内の粒径分析を行うと、細かい砂があまり無いという結果が出ていた。それも大きな要素であると考え。流量変動により、付着藻類が剥がれて下流に流れたといった現象が少しであるが読み取れる。乾くことにより剥がれやすくなる。流量が増えた時に剥がれるということがあるのかもしれない。そのような現象があるということで、もう一度変動型をそういう目で見えて調査を行う必要があると考える。宮中取水ダムのゲートは、洪水が来た時に開放することだけを目的に造られているゲートであり、細かい流量変動に対して2センチとか3センチなどのゲートの上げ下げをすることになるが、ワイヤーの緩みなど色んな問題がある。操作が非常に煩雑である。JRから話を聞くと非常に操作が大変であると聞いた。その中で操作が出来るだけ簡単になる方法が重要だということで、宮中取水ダム試験放流検証委員会でもその点については発言をしている。操作が簡単になる方法を考えるべきではないかと思っている。サケの漁には流量が安定している方が良く、変動しない方が良いということであるが、それも一つあると思う。秋のサケ遡上時期にそういうことを考えた方がいいのかもしれない。変動型が一番影響を与えるのが夏場であると思う。夏場に変化することにより、先ほどの虫が死ぬだとか色んな植物が生息したり枯れたりといったことがあることで、夏場に変動型が行われることにより川の生態系が変わるのではないかとと思われる。宮中取水ダムのゲート操作が大変難しいということで、ゲートを作りかえれば一番いいが、おそらく何十億円の費用がかかるだろうから、次に耐用年数によりゲートを作りかえる際にそういう対応をお願いすることがリーズナブルではないかと考える。6年目以降変動型を主張するかについては思案中である。ご理解いただきたい。

#### (山田委員：信濃川をよみがえらせる会)

P25【3】調査や確認を希望する事項において舟下りの要望があるが、短い期間で流量が違う川を同じ人が下ることはなかった。来年度は、川の形態が同じなのはもちろんであるが、下る人も100と50など2つの水量を同じ人が比較できるような、事前にモニター登録をしてもらうなどそのような形で実施してもらうといいと思っている。関係者で下っても解っていない方が多い。今後、十日町市も田舎体験で信濃川を楽しんでもらうという計画もあるので、若い方や子供が水量によって川の楽しさがどうであるかを調査・アンケートを行うことが大事であると思っている。安全や安全ではないという言葉が出てくるが、プロの業者がスタートする時点で基本的には安全であると思う。ラフティング業者が何%以上なら下らないという規定があるので、100であるから危険であるなどそういう感覚は持たずに純粹に川下りを楽しむ結果を知りたいと思っている。

#### (事務局)

実施できなかった場合には、市で対応できるよう準備をする方向で検討したい。

#### (長谷川委員：中魚沼漁業協同組合)

ラフティング業者は自信を持って安全だと言っている。事故があった場合はそれだけの対応するということであるので気にすることはない。ただし、川でも登山でも湖でも海でも自然利用については自己責任においてである。例えば、魚釣りにしても川に入り流されたなども自己責任の範囲である。何でも責任を取ることにしない。自由使用のもとで行われることをご理解をしていてもらいたい。

#### (柄澤委員：川西地域振興会)

水温が28度を下回る環境を探るとしているが、実際に水温28度をどの程度超えた期間があれば影響が出るのか。

#### (事務局)

信濃川中流域水環境改善検討協議会でも冷水性魚類の生息が困難になる温度が28度ということで一つの目安としている。試験放流期間中に28度を超えた日が何日かある。測定箇所は、十日町橋、妻有大橋、栄橋、川井大橋付近である。最高水温が28度を超えたのが、平成22年度22日、平成23年度3日、平成24年度23日、平成25年度9日であった。それぞれ放流量も違い、気温も違う。さらには、宮中取水ダムへの流入量も違っている。そのような気象状況において28度を超えない流し方はなんであるかを知りたいことから、専門部会の考え方をまとめた。

#### (柄澤委員：川西地域振興会)

具体的には22日間続いたことでどのような弊害があったのか。

**(長谷川委員：中魚沼漁業協同組合)**

冷水性の魚は信濃川にはあまりいない。冷水を好む魚はいるが、乱暴な話であるが、水槽で28度に設定し何時間で駄目になるのかとなる。川の場合は、上流から下流まで全て28度になれば相当の影響があると思うが、ポイントや区間が28度になったとしても魚は好む水温の方へ逃げていく。どの川でも色々な要素で水温が上がることは自然現象で避けられないことである。昨年、高知の四万十川でダムのない自然の水量であるが、水温が高くなり酸欠となり魚が相当数死んでしまったという状況がある。

**(事務局)**

水温が28度を越えた日に魚が浮いたや大量に死んでいるのが見つかったなど、そういうことがあったというわけではない。あったかどうかの確認もできていないが、国で指標としている数字を目安に議論をしたということである。

**(大熊アドバイザー)**

四万十川にはダムがないという話であったがダムはある。

**(長谷川委員：中魚沼漁業協同組合)**

知っている。通常にはダムの無い最後の清流と言われている。

**(大熊アドバイザー)**

そこが四万十川の問題である。

宮中取水ダム地点ではだいたい水温は25度くらいである。川幅が広いために河原で熱を吸収することで上昇していくということである。西大滝ダムから下流ではユリイ橋までは上がるが、途中でシクミ川、中津川、清津川が入り水温が下がり、宮中取水ダムでどんなに暑い年でも25度代である。放流され下流に行き28度を越えることになる。

**(山田委員：信濃川をよみがえらせる会)**

冷水性の魚が信濃川にはいないという話であるが、今いないだけで昔はいたと思われる。信濃川のあり方を考える観点から、今はいないからいいのではなく、冷水性の魚も戻ってくる夢のある議論をした方がよい。そのために28度以下を探るなどの話が出たのだと思う。

**(長谷川委員：中魚沼漁業協同組合)**

冷水性の魚が棲まなくても良いという意味合いではない。今はいないということ。決して棲まなくても良いとは思っていない。そこまですると調査が非常に大変になる。

**(高橋委員：高山地区振興会)**

昨年8月19日に40トンのラフティングに参加した。40トンでもボートが座礁するということがほとんどなかった。1箇所底がつかえたがボート内での体重移動でクリアをした。

栄橋付近から大量のカワウがいる。あれほど大量のカワウがいることは想像がつかなかった。カワウも生きていくために魚を何匹食べるのか知らないが、漁協でも毎年稚魚放流を行っているわけであるが、稚魚放流以上に食べなければカワウも生きていけない。昨年ドライアイスで凍らせて駆除を行ったと聞いているが、魚もカワウも生きものであるのだどのように対処していくべきなのかお聞きしたい。

**(事務局)**

カワウのデータの的なものはおさえていない。

**(委員長)**

農水省の関係ではないか。

**(長谷川委員：中魚沼漁業協同組合)**

稚魚放流以上に食べられているのは確かである。稚魚放流以前の魚も食べるし、川だけではなく養殖池、他の河川でも食べられている。コロニーで繁殖している。各自治体、猟友会、漁協が連携し、卵を冷却により雛が孵るのを抑制したり、雛を猟銃によって駆除をする。全滅させるのではなく共存ができる数にしたいということである。毎年相当な人手と費用をかけて行っている。2,000羽近くいたが700羽ほどに一時だいぶ減ったが、最近徐々に増えてきている状況である。正直に言ってイタチゴッコという状況である。毎年行わなければ益々増える一方であるのでこれ以上増えないように対応している。

**(吉楽委員：中里まちづくり協議会)**

放流量が40トン80トンなど色々話されているがそれはそれで良い。魚道改修されありがたかった。観察室も孫を連れて見に行き喜んでいて。宮中堰堤の水量もやりながら、上下に魚が上るための魚道が改修されたことは喜ばしいことである。魚道の効果はどうか。改修されたことにより効果が上がるのは解るが。

**(佐坂委員：JR信濃川発電所業務改善事務所)**

魚道そのものの効果かどうかは解らないが、サケ遡上に関して報告の中では稚魚放流を行っていることで遡上数が増えていることは言われている。一昨年ではアユが大量に上ったが、魚道の効果であるのか一概には解らない。例えば、魚野川が濁っていたために信濃川に上がってきたのかなど。魚道を上る魚種は少し増えているのは間違いない。長い目でみてもらえればと思っている。

**(事務局)**

検証する委員会もあり、長い目で検証していこうということで考えている。魚道の効果ははっきりと出ているという結論まではしていない。今後、色んな経過の中で効果が少しずつ検証されていくものと考えている。

**(吉楽委員：中里まちづくり協議会)**

放流量も大事であるが、魚が上ったり下ったりすることも一緒に考えていかなければならない。

**(委員長)**

専門部会として出した結論について色々な議論をいただいたが、その他に意見が出てこないようであれば、今回のこの中身を市長に報告することとしてよろしいか。

**(全委員)** はい。

**(委員長)**

反対をする方がいないと理解し、市長にこの内容を報告することとする。21日に市長に報告する。私も同席をする。

## 5. その他

**(事務局)**

今後の予定として、2月25日に信濃川中流域水環境改善検討協議会が開催され、来年度の試験放流方法が決定される。その結果について及び住民意識調査の分析結果を知らせるために、事務局としては、年度末の忙しい時期に集まっていただくことも大変であると思われるので、信濃川中流域水環境改善検討協議会結果及び住民意識調査分析結果を資料として配布し、新年度に信濃川のあり方検討委員会を開催し議論いただくことでお願いしたい。了解いただきたい。

## 6. 閉 会